

## 作家紹介

# 上田麻希



### 嗅覚アーティスト

東京生まれ。2000年よりオランダ在住。2015年より石垣島に嗅覚アート研究所を構える。

アートと嗅覚の融合を試みる、嗅覚アーティスト。世界的に新しいアートとして注目を集めている。wikipediaの「嗅覚アート」“[olfactory art](#)”の項にも先駆者としての一人として名を連ねる。

文脈や内容を強調するために匂いを使うのではなく、あくまでも「嗅覚」に焦点を置き、説明不要な体験を創出する。

ヴィラ・ロット・ミュージアム（ドイツ）、ミュゼ・デ・ラ・メ・ローザンヌ（スイス）、シンガポール国立美術館SAM、台湾国立現代美術館、リード大学（米国）などで展示。2018年、清須市はるひ美術館にて全館を使った大規模個展を行う。

慶應義塾大学環境情報学部（学士1997、修士1999）にて、藤幡正樹氏に師事し、メディア・アートを学ぶ。2000年文化庁在外研修として、2007年ポーラ財団在外研修として、オランダ&ベルギーに滞在。2009年よりオランダ王立美術学校・音楽院の学部間学科ArtScience や、

ロッテルダム美術大学ウィレム・デ・クーニング・アカデミー、岐阜県立情報科学芸術大学院大学などにて教鞭をとる。世界初の体系的な嗅覚アートの授業として知られ、多くの嗅覚アーティストを輩出。国内では独自の通信講座やオンライン講座を開講し、教育普及に励む。仏グラス・インスティテュート・オブ・パフューマリー(GIP)サマーコース修了。

世界的な嗅覚アートの殿堂、アート・アンド・オルファクション・アワード エクスペリメンタル・カテゴリーに5回連続ノミネート。2022年には最優秀賞を受賞。2024年、令和6年度文化庁長官表彰。作家名を「MAKI UEDA」から本名の「上田麻希」に改める。

ウィキペディア: 「上田麻希」

オンライン・ポートフォリオ: [www.ueda.nl](http://www.ueda.nl)

オンライン CV

アトリエとオンライン・アカデミー: [www.pepe.okinawa](http://www.pepe.okinawa)

Instagram: @makiueda

### 受賞歴

2009年、ワールド・テクノロジー・アワード（アート・カテゴリー）ノミネート

2016年、第3回アート・アンド・オルファクション賞 ファイナリスト

2018年、第5回アート・アンド・オルファクション賞 ファイナリスト

2019年、第6回アート・アンド・オルファクション賞 ファイナリスト

2020年、第7回アート・アンド・オルファクション賞 ファイナリスト

2022年、第8回アート・アンド・オルファクション賞 最優秀賞

2023年、第9回アート・アンド・オルファクション賞 ファイナリスト

2024年、令和6年度文化庁長官表彰

## エアロ・スカルプチャー - 香りの雲海 - (2022)



パンデミックにより、わたしたちは飛沫や排気など、目に見えない空気というものを知覚する努力を払うようになった。この作品では香りを使って、**目に見えない香りの空間を視覚化**。京都嵐山のために制作した新作。**もし我々が、香りを見ることができたとしたら**どうだろう——その疑問からスタートした一連のリサーチと実験の総称が **Aerosculpture** である。今回はドライアイスと煙の手助けを借りた。日本には伝統的に、お香文化がある。お香には、単に享樂的に空間を香りで彩るというだけでなく、おもてなしという礼の意味もあるし、宗教的には邪鬼を払うという役割もある。寺院に参拝する際も、まず頭から煙をかぶり、身を清める。子どもの頃、単に煙をかぶることが楽しかった。つかめそうでもつかめないそれを、必死につかもうとした。そうやって香りと遊ぶ場を、この作品で提供しようと考えた。展示会場が古都京都の参拝の地、嵐山であることから、「寺院のお香の香り」をドライアイスで出す実験をした。音楽家 **Friederich Glorian** のチベット・ゴングによる実験音楽が時空間に奥行きを与えてくれた。このように、**時間軸と空間軸のコンポジションにより、香りはパフォーミングアーツにもなりうる**ことの表明でもある。

**2022年：京都嵐山芸術祭**

**2023年：アート・アンド・オルファクシオン賞ファイナリスト**

# パリ協定のための匂い (2020)



「匂いは地球温暖化問題の解決に貢献できるのか？」という問いから発して制作された作品。自動車メーカーMAZDA EUROPEによるコミッション。ふたつの空間はエアコンにより同じ温度・湿度に保たれている。行ったり来たりしながら、匂いと温度感覚の関係性を体感するもの。温度感覚のセンサーがある三叉神経に直接、生理的に働きかける芳香成分を使用。トロント大学の研究者からアドバイスを受け、科学に忠実に香料を選び、美的に調和の整ったフレグランスを作った。コンピューター・サイエンスの学会ACM-CHI分科会においても発表。

左上：「温感の部屋」に入ると、喉が渇く感じがする。「冷感の部屋」に入ると、清涼感がある。

(お客さんの反応)

左下：ポータブルエアコンにより温度を一定に保った。

右：コロナ禍の中、パリにて、マツダの周年記念パーティにてお披露目。

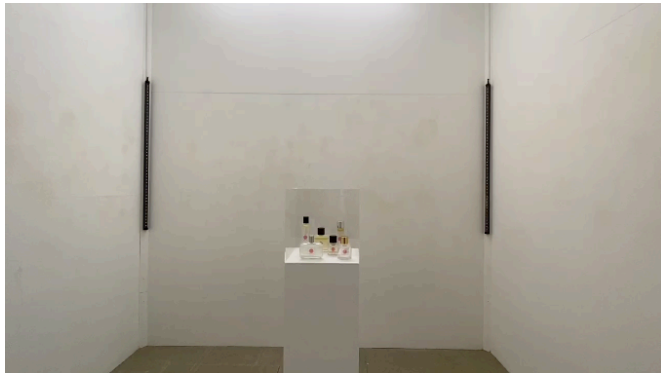
冷感フレグランス：

- menthol
- eucalyptol
- thymol
- citral
- cinnamaldehyde
- linalool
- methyl salicylate

温感フレグランス：

- Black pepper
- Camphor
- Eugenol
- Red Chili Extract (self extracted)
- Methyl Salicylate

# バイラル・パフューム - もしもコロナウィルスが匂って見えるものだったら - (2021)



この展示では、ウィルスを香りに喩えた。ビジターは、部屋の好きなのところに、「ウイルス・パフューム」をスプレーしても良い。他のビジターは、香りを頼りに、ウイルスの付着している箇所を探り出す。ふつうの明かりの下ではウイルスは見えないが、時折、ブラックライトにより照らし出されるようになっている。ウイルスの種類は、変異種を含め6つ用意した。それぞれタイプの異なる香りであり、香りが空間で混ざり合った時、「白百合」の香りとなる。新型コロナウイルスによる死者を弔うための香りである。

**2021年: プレーメン市立ギャラリー**

**2022年: アート&オルファクション賞最優秀賞**

- NO.1: Skyblue : Ylang ylang oil, Hydroxycitronellal
- NO.2: Green : Citronellol, Ionone alpha, Iso Eugenol
- NO.3: Yellow : Ylang ylang oil
- NO.4: Blue : Nerol, Geraniol, Paracresyl Phenyl Acetate
- NO.5: White : Linalool, Vanillin, Phenyl Acet Aldehyde
- NO.6: Orange: Neroli Base (original composition)

## タンジブル・セント - 空気中でのバラの香りの再構成 - (2018)



「Tangible Scents」は、作家が独自に開発した「**空気中での再構成（調香、コンポジション）**」という手法を用いて、バラの香りを再現する野外インスタレーションである。バラの香りを構成する5つの主要な成分が、それぞれ5台のバブルマシンにより空中に放たれる。泡をつついて個々の要素別に嗅ぐこともできるし、トータルな香りに浸ることもできる。

2018年：リード・アーツ・ウィーク2018（ポートランド）

2019年：アート&オルファクシオン賞ファイナリスト

## 土の香水 - 環境の変化を嗅ごう - (2014)



このプロジェクトの目的は、匂いによってオランダの港町ロッテルダムの土をリサーチし、「土の香水」を作ることであった。結果は良い香りではなかった。しかしそれは受け入れざるを得ない。ロッテルダムはライン川の下流に位置する工業都市で、汚染された水と空気が流れ込む。香りは嘘をつかない。対照的に、石垣島の赤土の香りはとてもクリーンで、パワフルな陽の匂いがする。真実は匂いの中に表現されている。

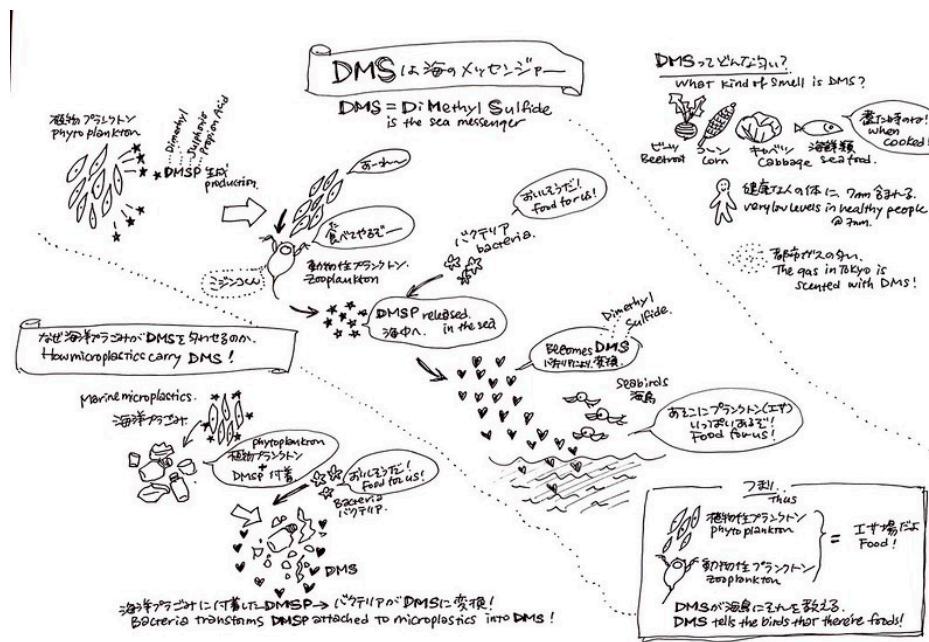
それぞれ土地を、その土の香りが体現している。どれも同じ匂いはしない。その土地の微生物や植生、汚染の度合いが大地の香りに現れる。

土の香りの蒸留方法を会得するにあたって、インドのカンナウジでリサーチした。

(ロッテルダム市O&O助成金により制作)



# あのプラスチックおいしそう - マイクロプラスチックの匂い - (2023)



海の生物がマイクロプラスチックを餌と間違えてしまうのは、その見かけからではなく、匂いからだということが、最近の科学で明らかになっています。プラスチックは匂いを吸着しやすい素材です。プランクトンの生成する匂い、Dimethyl Sulfide (DMS)も吸着します。海の生物は視覚が弱く、嗅覚は鋭いので、プラスチックが「擬似エサ」であることを疑うことはできないのです。

この作品では、青い玉は海を表し、白い玉はプラスチックを表しています。マイクロプラスチックの匂い(DMS)を人間が嗅ぎやすいように設計することにより、匂いによる環境問題への問いかけをするものです。

## 戦争の果汁 - 広島 & 長崎 - (2015)

2015年ベルギーで開催された「戦争の匂い展」にて展示。広島と長崎は原爆投下後、ひどい悪臭に覆われたという。その匂いを体験できるようなインスタレーション。匂いはスーパーのお肉を使って抽出し、状況の再現を試みた。展示方法は、アクリルのヘルメットのようなものを「ヘッド・マウント・ディスプレイ」のようにしてかぶり、その中で匂いを嗅ぐという仕掛けをデザイン。

2016年：アート・アンド・オルファクシオン賞ファイナリスト

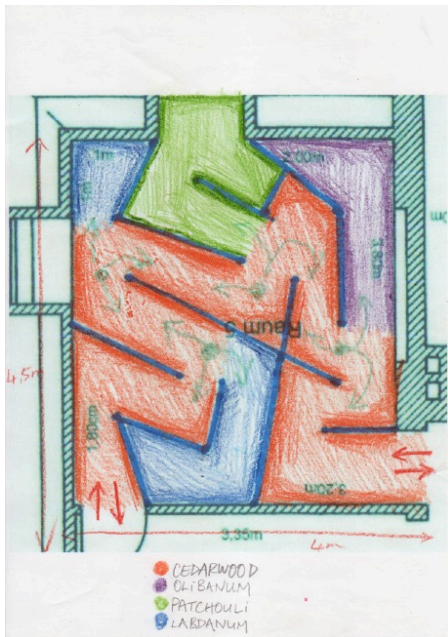


# 嗅覚のための迷路 VER. 2 (2015)

ライフサイズの迷路。壁にはさまざまな木の香りが賦香されている。入り口から続くひとつの香りだけを辿って、出口を見つける、という作品。

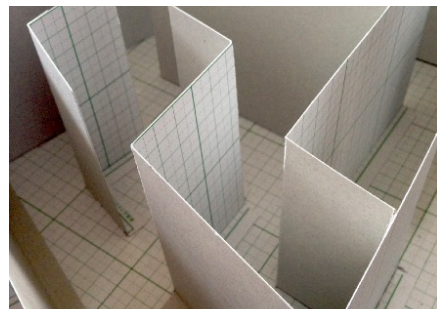
2015: ヴィラ・ロット・ミュージアム (ドイツ)

2018: ローザンヌ・ホスピタル・ミュージアム (スイス) 1年間の恒常展示

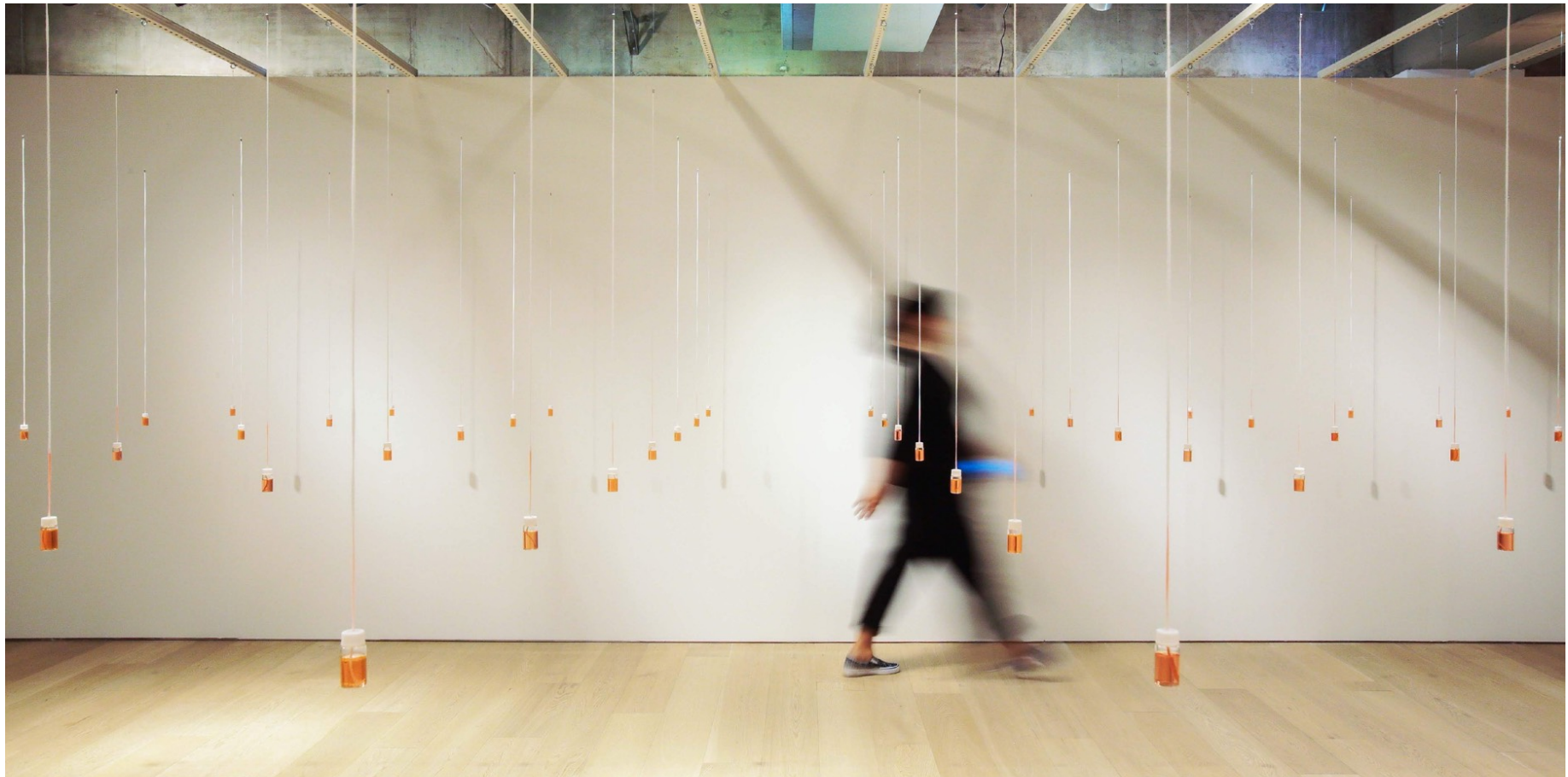


写真下：1/1000模型  
写真左：方向感覚をなくすため、通路の幅、曲がり角を、不揃いに設計

赤: Cedarwood  
紫: Olibanum  
緑: Patchouli  
青: Labdanum



## 嗅覚のための迷路 VER. 4 - お花見スポットを見つけよ - (2018)



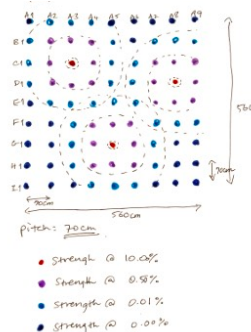
この迷路には、3本の見えない桜の木があります。匂いの強い方向に進んで、見つけてください。（答えは右図のとおり）

「嗅覚のための迷路 ver.4」は「お花見」がテーマ。桜は夜にこそ、ほのかに匂う。真っ暗な闇で、そのほのかな香りをたどって桜の木にたどり着けるかどうか、、、そんな迷路を再現。匂い物質とその強度の関係について、**フェヒナーの法則**が知られている。匂いの強度をI、匂い物質の濃度をCとすると「 $I = a \log C$ 」で表すことができるという。匂いの知覚強度を2倍にするためには、香料の濃度を10倍にしなければいけない。この対数の法則を今回の迷路に応用し、3本の「桜」には最強濃度を配置、そこから遠くなる程、濃度は薄くなる。視覚的にもミニマルで抽象的な空間の中、動き回ることで匂いを体験する作品。

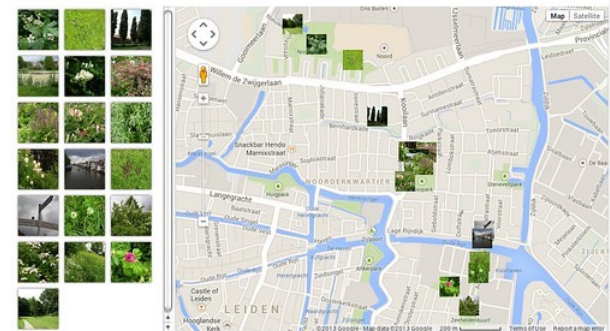
2018: ジャパンハウス サンパウロ（2ヶ月間の展示、来場者数のべ30万人、メディア報道数114）

2019: 清須はるひ美術館

2020: 台湾国立現代美術館



# ウォーク・アンド・スニフ & アロマスケープ・ワークショップ (2009-)



2009年より世界のさまざまな地域で展開している、地域の匂いを嗅ぐワークショップ。以下の要素からなる、複合的なワークショップ。

- 1: 匂いを嗅ぎながらウォーキング
- 2: 匂いの素材を収集→抽出
- 3: 匂いの展示
- 4: デジタルマップに写真付きでマッピング
- 5: フィジカルマップに旗を立ててマッピング

2009年：オランダ・ライデン、オランダ・ロッテルダム、大阪、2010年：オランダ・アイントホーフェン、東京井の頭公園、2011年シンガポール、ほか

## 嗅覚のためのゲーム (2009-)



世界中の芸術大学で「匂いxアート」をテーマに授業を展開。最終課題は、「嗅覚のためのゲーム」を作ること。これまで述べ70人ほどの生徒がゲームを開発。**世界初の嗅覚アート**の授業と讃えられる。

2009年 オランダ・ハーグ

2011年 オランダ・ハーグ

2013年 オランダ・ハーグ

2017年 オランダ・ハーグ

2018年 岐阜IAMAS

成果発表：ロフトワーク、  
MEDIAMATICなど多数

**2018年 アート・アンド・  
オルファクシオン賞ファイナ  
リスト**

